

マーク・トウェインの説教者たち —天国のサム・ジョーンズ—

朝日 由紀子

1

マーク・トウェインと交流のあった牧師のなかで、マーク・トウェインの生涯を通じて、最も親密な関係を築き上げたのは、アサイラム・ヒル組合派教会牧師ジョセフ・トウィッチェルである。1867年、ヨーロッパ・聖地旅行から帰国したトウェインは、その旅行記の出版の用件で、翌年、コネティカット州ハートフォードにある出版社を訪れた際、トウィッチェル牧師の知遇を得た。以来、マーク・トウェインの人生の重大な局面において、すなわち、トウェインのオリヴィア・ラングドンとの結婚式、長女スージーの葬儀、妻オリヴィアの葬儀、三女ジーンの葬儀、そして、マーク・トウェイン自身の葬儀にもトウィッチェル牧師は立ち会っている。また、トウィッチェルが、その深交を通じて、トウェインの創作活動への点火役をつとめたことも再三あったことは、トウェインの言及から明らかであり、こうしたことから、マーク・トウェイン文学への貢献に重点を置いたトウィッチェル研究がなされていることも頷けよう。リア・ストロングの、『ジョセフ・ホプキンス・トウィッチェル——マーク・トウェインの友人であり牧師』と題する伝記（ジョージア大学、1966年）は、その好例である。¹

¹ スターヴ・コートニーによる新たなトウィッチェルの伝記、*Joseph Hopkins Twichell: The Life and Times of Mark Twain's Closest Friend* (U of Georgia P, 2008)については、

このように、マーク・トウェイン研究において、トウィッチェル牧師の存在が重要な意味をもつことは、言を俟たない。だが、あらためてマーク・トウェインの「牧師」に対する関心という観点で作品を眺めてみると、トウェインと同時代の牧師を実名で登場させているいくつかの作品に気づき、注意を引く。それらは、バーレスクという文学手法を用いた作品といえようが、バーレスクが機能する上で、実在の牧師でなければならない。代表的なのは、長老派牧師トーマス・ドウィット・タルマージであろう。本論では、とりわけ「天国」という共通のテーマをもつ作品として、*Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven* に触れ、そこに名が登場するドワイト・ムーディーについて検討した後、“A Singular Episode: The Reception of Rev. Sam Jones in Heaven”を取り上げ、カンタベリー大司教、マーク・トウェイン、そしてサムエル（サム）・ジョーンズという中心的な登場人物に焦点を合わせ、考察していく。一見して明らかなのは、「聖職者」と「ユーモリスト」が対置されていることである。

2

まず、マーク・トウェインの伝記的事実として、興味深い点を見ておこう。まだ本名のサムエル・クレメンスであった頃のトウェインが、それまで自分が抱えてきた二つの大望について、兄のオリオンにあてた手紙（1865年10月19日）で語っているつぎの言葉である。「ひとつは、蒸気船のパイロットになることであり、もう一つは、福音（the gospel）を伝える牧師になることでした。一つの方は、成し遂げましたが、もう一つには失敗しました。ぼくが牧師の仕事に必要な、宗教の知識を蓄え

以下を参照。朝日由紀子 『マーク・トウェイン研究と批評』第9号 南雲堂 2010年117-119。

ることができなかつたからです。ほくは、永久に諦めました。ともかく、その方面には『召命』がまったくなかつたのです・・・しかし、これまで文学にはあって、それも低級な種類の、言い換えればユーモアに富む文学への『召命』はありました。」²といい、続けて、「マタイによる福音書」の25章14節～30節の「タラントンのたとえ」を引き、「神様が創った人間の笑い声と呼び起こすために、真剣に文筆を業とすることへ関心を振り向ける」という自覚を語っている。この発言の傍証として、トウエインが、同じ10月の16日から23日の間に、“Jim Smiley and his Jumping Frog”を執筆中であつたという事実を想起すると、この手紙がきわめて興味深く、重要であることがわかる。翌11月18日、ニューヨークの週刊紙『サタデー・プレス』に掲載されるや、その作品への称賛の大歓声上がり、ニューヨークから東部、そして全米へと、「マーク・トウエイン」というペンネームは、知れ渡つた。それまで印刷工、蒸気船パイロット、坑夫、ジャーナリストとさまざまな仕事を経てきたサムエル・クレメンスは、作家マーク・トウエインとして誕生し、それ以降文学者人生を送ることになった。たしかに、牧師になることを諦めたマーク・トウエインであつたが、その文学の特質を正しく捉えるためには、マーク・トウエインのユーモアの基底に、説教者の精神が息づいていることを看過してはならないのである。

1906年、それまでの作家人生を振り返り、マーク・トウエインは、つぎのように「ユーモア」と「説教」とのつながりを語っている。「単なるユーモリストだけでは、生き残れない。ユーモアは、香り、飾りにすぎないし、しばしば言葉つきとスペルに関する風変わりなトリックというだけである。・・・ユーモアは、公然と教えてはならないし、

2 Edgar Marquess Branch, Michael Frank and Kenneth M. Sanderson, eds. *Mark Twain's Letters Vol.1 1853-1866*. Berkeley: U of California P, 1988, 322.

また公然と説教をしてはならないが、もし永久に生き延びようとするなら、両方ともしなければならない。永久という意味は、30年であるが、わたしは、いつも説教をしてきた。それが、30年間わたしが持ちこたえてきた理由である。」³ この含意を確認しておくことは、後述する“A Singular Episode: The Reception of Rev. Sam Jones in Heaven”のモチーフを考える上で参考になると思われる。

3

さきに触れた“Jim Smiley and his Jumping Frog”は、西部の果て、カリフォルニアのエンジェルズ・キャンプを舞台とした、「ヤーン(yarn)」という物語形式の傑作である。このマーク・トウェインの最初の作品では、冒頭、福音派の牧師、レオニダス・W・スマイリーの消息を知るために、語り手マーク・トウェインが、エンジェルズ・キャンプを訪れるところから始まる。ところが、尋ねた相手のサイモン・ウィーラーは、同じスマイリーでも、牧師についてではなく、まったく違う賭け事に夢中の西部男ジム・スマイリーについて長々とその逸話を語り続けていき、終わりのない物語形式がこの作品の特徴となっている。あらゆるものを賭けの対象にするジム・スマイリーの逸話のなかで出色なのが、ウォーカー牧師を相手に賭けをする場面である。牧師の奥さんが長く重い病気で伏せていたある日、牧師に奥さんの容態を尋ねたジムに、「神様のお恵みにより病状は良くなってきており、これからも神様のお恵みでいずれ回復するだろう」と返事をした牧師に向かって、すかさず「奥さんが治らない方に2ドル半賭ける」と、ジムは言ったという。この逸話の面白さは、相手が牧師であることと、さらには、「神様

3 Mark Twain. *My Autobiography: "Chapters" from the North American Review*. Mineola, New York: Dover Publications, 1999, 202.

のお恵み」に感謝をした牧師の言葉と反対の方に賭け、神の御心に逆らったことにまったく気づかないジムの無邪気さである。

つぎに取り上げるのは、“Buck Fanshaw’s Funeral”という短編で、それは、初めて兄オリオンに同行してネヴァダにむかって西部を旅し、1861-66年の間ネヴァダ、カリフォルニアに滞在した経験を作品にした *Roughing It* (1872年) の47章に収められている。銀ブームに沸いていた時期のネヴァダで、豪華な酒場のオーナー、バック・ファンショーにふさわしい豪華な葬式がいかにか執り行われたかが、そのおもな内容であるが、ファンショーの親友のスコッティ・ブリッグズの逸話を語るものともなっている。なかでも、とりわけ面白い箇所は、ブリッグズが、東部の神学校を出てネヴァダに来て間もない若い牧師と会い、司式を牧師に依頼しようとしてなかなか伝わらず、ネヴァダ俗語をふんだんに駆使して自分の使命を果たそうと必死になるところである。牧師と最初に会ったとき、「となりの讚美歌工場の主任さん」と呼びかけたことに対し、「となりにある囲いの羊を預かっている羊飼いです。」と応じた時点で、ふたりはそれぞれが使う言葉の食い違いに困惑し、戸惑う。葬儀の話題を進めようとしても、いよいよコミュニケーション・ギャップは大きくなっていくという喜劇的状況と化していく。かたや、消防ヘルメット、真っ赤なネルのシャツ、スパナと拳銃をつるしたエナメルベルトという出立ちの荒くれ男のブリッグズ、それに対し、青白いひ弱な牧師という対照が、劇的効果を生んでいる。

バック・ファンショーの葬式で立派に役目を果たしたブリッグズが、その後、その土地の荒くれ者のなかでただ一人クリスチャンになったという意外な転身について語られる点が、興味を引く。ブリッグズが教える日曜学校のクラスは、ほかのクラスより進み具合が早かったという。その理由は、ブリッグズが開拓者の子供たちにわかる言葉で話しかけて

いたから、と説明される。じじつ、マーク・トウェインは、ブリッグズの亡くなるひと月前に、ヨセフとその兄弟たちの美しいストーリーを「本を見ずに」、よそ者にはわからない俗語で熱心に語っているブリッグズの姿と、それを興味津々に聞いている幼い生徒たちの姿を見る機会があった、と語り終える。

子供たちのわかる言葉で聖書の物語を教えたブリッグズは、“A Singular Episode: The Reception of Rev. Sam Jones in Heaven”で描写されるサム・ジョーンズへとつながる、マーク・トウェインの関心のあり方を示している人物である。また、ここで確認できることは、マーク・トウェイン文学の初期の作品において、「牧師」が単なる場面構成の一部としてではなく、マーク・トウェイン特有のユーモアを生む主要な登場人物のひとりといえることである。

4

マーク・トウェイン文学の後期の作品で注目すべきは、マーク・トウェインと同時代に活躍した有名な説教者たちを登場させていることである。*Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven*では、ドワイト・ムーディー（1837-99）とイラ・サンキー（1840-1908）、トーマス・タルマージ（1832-1902）の名が、また、“A Singular Episode: The Reception of Rev. Sam Jones in Heaven”では、サム・ジョーンズ（1847-1906）の名が挙げられる。トウェインがなぜこうした説教者たちに関心を持ったかという興味あるテーマを考察するために、当時の説教壇について概観しておこう。

まず、18世紀までの説教法の、教義を聖書に依拠しつつ論理的に解説していくという伝統的な方法から、19世紀に入り、説教法が大きく転換していった軌跡をたどっておく必要がある。その根本原因を端的に

言えば、神学重視からの脱却傾向が時代的变化により進んだことによる
といえよう。そもそもアメリカにおけるピューリタニズムの神学は、カ
ルヴィニズムに基づいており、「原罪による人間の全的墮落」、「人間の
自由意志によらない神意による救いの予定」がその中心的な教義であっ
た。その強固な地盤を崩そうとする宗教的リベラリズムの風潮が、19
世紀になってから顕著に起こってきた。ニューイングランドを拠点とす
るユニテリアニズムもその一例といえるが、広範に見た場合、福音主義
が大きな勢力と影響力を持ったことが重要な変化をもたらしたことは確
実である。福音伝道の説教者たちが相手とする聴衆は、19世紀前半では、
農夫、奴隷、小売りの商人、奥地に住む者などに拡大されていった。また、
フロンティアでの開拓伝道も盛んになり、必然的に、野外集会に集まっ
てくる教育を受けていない人びとにむけての説教は、わかりやすく、退
屈しないような工夫が必要とされた。言うなら、ピューリタンの「理
性」や「知性」に訴えかける方法ではなく、福音主義がめざした大衆伝
道においては、「心」や「感情」に訴えかける方法へと転換していくのは、
必然的な推移であろう。一般大衆の心をつかみ、有名になったのが、前
述のタルマージであり、ムーディーであり、ジョーンズなのである。

心や感情に訴えかける方法とは、どのようなものなのかを検討する
と、それは、神学的ではない文学的手法を応用したものと解釈できる。
超越的真理を抽象的に説くのではなく、日常的な実例や逸話などを用
い、時にはユーモアを交えて、具体的なストーリーにより、人びとの
共感をよぶ方法といえるであろう。たとえば、ブルックリンのセント
ラル長老派教会のタルマージは、ニューヨークの評判の悪い地区の悪
徳や墮落を物語るきわどい話で、大勢の人びとを引き付けたことで知
られる。実際、タルマージは、1872年、警官や教会の長老たちにエス
コートされて、真夜中にニューヨークの賭博場や酒場、売春宿を探訪

し、そのときの見聞を説教に取り入れた。その説教は、教会でものすごい人気を博し、さらに、それが活字となって国内外の多くの新聞に掲載されたという。⁴ こうした方法をとるタルマージは、正統派から非難されたが、まったく意に介さず、率直にセンセーショナリズムを是認し、つねに最も仰天させるような、刺激的なテーマを選び、最大の効果を生むよう努めており、それで人を救うことができるなら、世間からセンセーショナリストと呼ばれることも厭わない、と語っている。その考えの背後には、専門的に語られる説教では、大衆は、寝入ってしまい、教会がまるで「日曜日の共同寝室」になってしまうという現実認識があったと考えられる。このことに関連して想起されるのが、マーク・トウェインの *The Adventures of Tom Sawyer* の5章の教会の場面である。“The minister gave out his text and droned along monotonously through an argument that was so prosy that many a head by and by began to nod—and yet it was an argument that dealt in limitless fire and brimstone and thinned the predestined elect down to a company so small as to be hardly worth the saving.”⁵ ここには、まさにタルマージの警句の通り、描写されているといえよう。牧師が、単調な口調で説教を長々としていくうちに、多くの人が居眠りを始めるが、その説教は、カルヴィン主義神学の定番の教義についてなのである。

ムーディーとジョーンズもまた、タルマージの系譜につらなる説教者であるが、タルマージと違い、きわどい話題を避け、死の床の場面とか、再生した罪びとや心安らぐ天国の生活などのセンチメンタルな話を用いた。さらに、いっそう広くあらゆる人に教派を問わず福音伝道を押し進

4 David S. Reynolds. “From Doctrine to Narrative: The Rise of Pulpit Storytelling in America.” *American Quarterly*, 32.5 (1980), 494.

5 Mark Twain *The Adventures of Tom Sawyer*. New York: W.W. Norton & Company, 2007. 35.

めようとしたので、かれらは神学など歯牙にもかけないことを公然と表明した。ジョーンズなどは、「わたしが宗教的信条をもっているとしたら、そんなものは博物館に売るだろう。」⁶と言い放ったという。

Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven は、ジャージー・シティ（ニュージャージー州）から天国にやってくる酒場の主人を歓迎する盛大なレセプションがクライマックスとなっている。その主人は、ニューヨークの「ムーディーとサンキーの集会」で回心をして、フェリー・ボートで家路についたとき衝突事故に遭い、溺死したのである。式典は、夥しい数の聖歌隊の歌声の後に、50万もの天使たちが行列で現れ、その後に続いて酒場の主人が満面に笑みをたたえ登場し、会場に設置された壇上に立つ。そこには宝石をちりばめた玉座が置かれており、何百万という会衆は、モーセとエサウを感激してお迎えする。この大成功に終わった歓迎式典を、酒場の主人は「永遠に誇りとする権利をもつだろう」⁷と、この作品は結ばれる。このように天国で栄光に包まれた酒場の主人が回心したのは、ムーディーの伝道集会であったという設定が、注意を引く。

ムーディーは、今日では19世紀の英米両国の福音伝道において最も功績のあった偉大な人物と評価されており、讃美歌の歌唱を担当してムーディーの伝道活動に協力したのが、サンキーであった。福音主義による世界的な伝道活動で有名なビリー・グラハムは、20世紀のD. L. ムーディーといってよい。だが、ムーディーの経歴をみると、正式な神学教育を受けたことはなく、まして聖職位を授与されていない。学校は、初等教育の段階で終わり、17歳で故郷のマサチューセッツ州の小さな町

6 David S. Reynolds. *Ibid.* 495.

7 Mark Twain. *Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven*. Oxford: Oxford UP, 1996, 121.

ノースフィールドからボストンに出ていき、靴を販売する仕事を見つけ、1856年にシカゴに移った後もその仕事に就き、靴のセールスマンとして成功する。その仕事のかたわら日曜学校を始め、千人以上の生徒を集めたという。このときムーディーは、「クレイジー・ムーディー」とあだ名をつけられ、子供たちをポニー乗りや特別な贈り物などで日曜学校に誘っていると批判もされた。また、無学で、牧師の資格のない単なる平信徒が、より訓練された牧師たちの任務を侵害していると抗議する者もいた。それでも、ムーディーは、1860年には靴の商売から身をひき、伝道の仕事をフルタイムに切り替え、日曜学校やYMCAに従事していく。福音伝道者としての成功への道を歩むことになる上で、決定的な転機が訪れたのは、1871年のシカゴ大火であった。ムーディーは、それによりすべてを失いホームレスになったが、海外伝道の機会が開かれたことと、なによりもムーディーに聖霊が下り、主の栄光を体験し、自分自身の変容を経験したことである。ムーディーは、以降、イエス・キリストの福音を伝えることに献身していくことになる。1873年から二年の間、アイルランド、スコットランド、イングランドの主要都市を巡回していったが、1875年のロンドンだけでも250万人に説教したため、批判する者ですら、ムーディーは、「地獄の人口を百万人減少させた」⁸と認めたという。卑しい普通の靴のセールスマンが、貴族や乞食にも、公爵夫人や沖仲士にも等しく、説得力をもって福音を賛美できる説教者に変えられたという驚くべき事実が示されている。

ムーディーの説教の力点は、教会に欠けているものがパワーであることを知って、聖霊を日々求め、待ち望むことが必要であると納得させるところに置かれていたが、それをどのような方法で語ったのであろうか。

8 Timothy George, ed. *Mr Moody and the Evangelical Tradition*. New York: T & T Clark International, 2004, 118.

デレック・ティドバールの紹介している例を引いて検討しよう。ムーディーは、教会が実り豊かな収穫物を産出しようとするなら、スピリチュアルな水を引いてくる必要があると指摘した上で、ノースフィールドの農場で過ごした子供時代の回想を事例として用いる。いかにも目の当たりに見えるように、谷間を眺め、その片側は作物で青々としているのに、もう一方は、乾ききった不毛な光景を描いてみせる。その違いは何かといえば、青々とした肥沃な土地の方は、農夫の手で灌漑されていたのに対し、もう一方の不毛な土地は、そのような手当てがなされていなかったのである。すなわち、教会は、聖霊で灌漑される必要がある、とムーディーは、農夫の仕事との類比によって牧師の仕事に必要なことを説く。さらに、井戸の例を引く。われわれは、「水が被圧で自噴する掘り抜き井戸」である必要があり、そうでなければ、ポンプで水を汲み上げる作業を繰り返し行わなければならない。それはきつい仕事であり、非生産的である。多くの牧師たちは、説教壇でまさにそのようなことをしているように見える、とムーディーは、聖霊の枯渇からくる不毛な徒労に言及し、「干上がった井戸からは、水を得ることはできない。」と、端的に誰にでもわかるたとえで本質的な問題の所在を明らかにする。ムーディーが、「コモン・マン」の説教者であり、普通の人々が喜んで耳を傾けたといわれる所以であろう。ジャージー・シティの酒場の主人もそのひとりといえる。

5

1907年に執筆された“Mental Telegraphy?”のなかで、マーク・トウェインは、“Captain Stormfield’s Visit to Heaven”という題の原稿を、『ハーパーズ・マンズリー』のクリスマス号のために送ったことに触れているが、興味深いことに、“The Late Rev. Sam Jones’s Reception in

Heaven”（ここで「故」となっているのは、前年のサム・ジョーンズの逝去を知っているからであろう。）についてくわしく語っている。17年前にドイツ滞在中に書いたその作品をすごく気に入ったので、発表したいと切に思ったが、不穏当になるかならないかのギリギリの笑いを誘う、とっぴなものであったため、妻が出版を許さなかった、と打ち明けている。それに続けて、作品の中心人物に設定したサム・ジョーンズについてつぎのように紹介しており、トウエインのジョーンズ評を知る上で興味を引く。

In that day Sam Jones was sweeping the South like a cyclone with his revival meetings, and converting the unconverted here and there and everywhere with his thundering torrents of piety and slang. I represented him as approaching the New Jerusalem in the through express, and in the same pullman in which he and his feet together were occupying two chairs, sat his grace the late Archbishop of Canterbury (Mr. Tate), and I.⁹

マーク・トウエインの表現から、信仰復興集会を開いて、大竜巻のように南部を席捲し、さらには「敬虔な信仰と俗語」を奔流のような勢いでたたきつけながら、あらゆる所において未信者を回心させていくジョーンズの説教者としての力強い姿が彷彿としてくる。

ここで、「新しきエルサレム」といわれているのは、「天国」のことであるが、そこに向かうのに、ストームフィールド船長は、船で行ったのに対し、この作品では、「プルマン」すなわち鉄道によるプルマン客車を交通手段に使っていることがわかる。

「ジョージアの驚異」と呼ばれたサム・ジョーンズは、ムーディーと

⁹ Ray B. Browne, ed. *Mark Twain's Quarrel with Heaven*. New Haven: College & University Press, 1970, 119.

並んで全国的な名声を獲得したメソジスト派の福音伝道者である。ムーディーの死後は、アメリカで最高に人気のある説教者の地位についた。飾り気のない率直なユーモリストであり、道徳的な観点から話す説教者であることを示しているのが、当時ベストセラーとなった *Own Book* である。「ウイスキーは、あるべき場所では良いものであり、その場所とは、地獄のなかである。もし、わたしがそこに着いたら、得られるだけ全部飲むだろうが、ここではそれをしない。」これは、ジョーンズの特徴をよく表すユーモアの一例といえるであろう。だが、ジョーンズの人生のなかで、じつは飲酒癖と苦闘した時期があることを知ると、ジョーンズのユーモアが体験に裏打ちされて生まれてきたものであることがわかる。

つぎに、*Own Book* の巻頭に付された「自伝的スケッチ」(“Autobiographical Sketch”) で語られたその生涯を、ここで簡単に見ておこう。1847年10月16日、アラバマ州で誕生した。父は、メソジスト派の牧師の息子であり、父方の祖母は、ジョージア州での開拓伝道に偉大な足跡を遺した牧師の娘であった。何世代にもわたって、両親の家系は、ともにメソジスト派であって、父の兄弟のうち4人が、いまやキリストの福音を伝える牧師である、という。このようにまず、メソジスト派の福音伝道者となったサム・ジョーンズの血統が語られた後、それに至るまでの波乱の人生が語られていく。

9歳のとき、母が亡くなり、その4年後父は再婚して、1859年にジョージア州に居を移した。南北戦争が始まり、1861年父がヴァージニアの軍隊に入隊し家を不在にした間、不道徳な生活に嵌っていき、21歳まで放浪を続け、体をこわし、精神的に墮落していった。悪性の神経性消化不良症を病み、父の勧めてくれた大学教育を断念する。損なわれた健康、不眠が続く夜、不安な日々の慰めとなるものを酒に求め始めると

いった状態のなかで、法律を学び12か月後に法廷弁護士の資格を得た。1869年に結婚し、成功の見込みが大きいという期待をもって弁護士を開業したが、飲酒にのめりこんでいき、野心や生きる活力すべてが、この恐ろしい欲求により蝕まれていった。このような状態が、1872年8月まで続く。

そして、その時ジョーンズは人生の最大の転機を迎える。最良の味方であった父が、最後の別れの言葉「グッドバイ」を病床で口にしたとき、それは「永遠に」を意味しているかのようにであったが、父は、かろうじて持ちこたえてこの世に踏み止まり、「父と天国で会う」とジョーンズに約束するよう促したのである。「惨めな、破滅していた自分であったけれども、その約束をし、そして、その約束に対して忠実であることに、わたしは、天国に対する最も大きな希望をつないでいる。」とジョーンズは語っている。

模索の日々を経て、平安と許しが与えられた時、自分は、福音を説教すべきであると心に感じる。数人の説教者に助言を求めると、みな同じく、「あなたは、説教するよう召されている。」という。実際に説教の機会が訪れるのは、ジョーンズが回心をしてすぐのことであった。その日、バートン巡回区の責任者であった祖父といっしょに、家から2マイルの所にあるニューホープ教会に行くことになり、そこに到着したとき、説教をするはずのサンフォード牧師はいなくて、また、祖父は、声がひどくかすれていて説教できなかった。そこで、祖父は、孫に、「今晚は、おまえが説教しなければならない。もし神さまがおまえを説教するよう召しておられるなら、おまえはできる。説教壇に来なさい。」と言ったのである。ジョーンズは、恐れとからだの震えを感じながら、言われた通りにした。教会の会衆はみな、自分が手におえない、向こう見ずな若者であることを知っていたからである。聖書の箇所を朗読した後、未開

拓地のメソジスト派の牧師のやり方を採用して、聖書解釈に入るのではなく、聖書を閉じて、語り始めた。「朗読した箇所の説教はできませんが、悪魔を物ともせず、わたしの経験は語ることができます。神と人間への満ち溢れる愛がほとぼしる心のうちから、神様のわたしに対する恵み深いふるまい」について語ると、数百人もの人々が感動して涙を流し、悔い改めのために説教壇の前に出てくるよう招いたとき、大勢の人が押し寄せ、しかも多くの人が回心を告白したという。このときが、サム・ジョーンズの最初の説教体験となった。そして、それは、これ以降の説教スタイルの原型ともいえるものであった。

「自伝的スケッチ」は、ジョーンズの伝道活動の実例が豊富に語られており興味深い。ここでは、特徴的な説教スタイルと思われる箇所を引用しよう。“Poor sermons and poor exhortation with the spirit of earnestness behind them will yield richer fruits than the most powerful logic and ornate rhetoric without the spirit of earnestness. Earnestness can not be feigned.”¹⁰ ここでのキーワードは、earnestness であることは明らかであろう。最強の論理や華麗な修辞法を用いても、本気で語る熱情に欠けていたら、豊かな実を結ばないといい、それに続けて、ジョーンズは、最初の説教からずっと一貫してその信念は変わらないと力説する。そのことは、別の箇所で語っている、神学の細部にこだわる議論や、「墮落」、「義認」、「新生」などの教義を神学的に議論しないという姿勢と関係するであろう。また別の所で、自分の説教に対して受けた最もすばらしい賛辞として、つぎのようなエピソードを紹介しているが、ここにもジョーンズの説教スタイルを見て取ることができる。ある幼い男の子が父親に、ジョーンズさんは、話していることがぜんぶ

10 Sam P. Jones. *Sam Jones' Own Book: A Series of Sermons*. Columbia, SC: U of South Carolina P, 2009, 21.

理解できるたった一人の説教者だから、また自分たちの巡回区に来てほしいと願ったというのである。

6

“A Singular Episode: The Reception of Rev. Sam Jones in Heaven”は、一人称形式の作品で、語り手の名が「マーク・トウェイン」であることはいずれ明かされるが、それは意外にもカンタベリー大司教の口から発せられるという面白い趣向がなされている。¹¹ 語りの始まりから、長旅もいよいよ目的地に近づいていることがわかる。そして、「汽笛」、「補助の車掌」などの言葉から列車の場面が読者に想像できる。ところが、車掌が大声で知らせる駅名は、「ニューエルサレム」であり、また続けて「通過して黄泉の国まで行く方々は、そのまま席についてください。あとの皆さんは、進み出て隣の客車に移ってください。」というまったく想像を超えた展開となっていく。ここで使われている言葉に注意すると、ひとつは、「ニューエルサレム」であり、「ヨハネの黙示録」21章で、「聖なる都、新しいエルサレム」と記されているその言葉を用いている。福音書の説く天国よりも、同じ21章の26-27節の、「人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。」という箇所が、この作品の内容に適用されていることは、これから見ていくなかで明らかになるであろう。またもうひとつは、それと対をなす「黄泉の国」を意味する、ユダヤ教での“*Sheol*”が使われていることである。

語り手は、黄泉の国に行く運命から逃れる可能性はまったくないと思ったとたん、隣りに座り合わせた人が去っていき、その代わりにきわめ

11 Howard G. Baetzhold and Joseph B. McCullough, eds. *The Bible According to Mark Twain*. New York: Touchstone, 1996, 199.

て上品で慈悲深い顔つきの見知らぬ人が座り、穏やかに眠っていた。その人は、「カンタベリー大司教」であることに容易に気がつく。それは、帽子のリボンにはさんでいる特別に金で彩飾された通行券が目立っていたからである。そのような通行券を持っている人は、人間の性質として、高い地位にふさわしい幸運を、そうではない恵まれない人びとに見せびらかすという誘惑にかられやすい、と語り手はいう。

語り手も自分用の通行券をもっていたが、およそ誇示するようなものではなかった。語り手は、眠っている人の通行券と自分の通行券とを交換し、前の方の客車に移動する。まもなく列車は停車し、外に出ようとしたとき、頬には噛みタバコ、つばの広いソフト帽を深く被り、派手な南西部の服装に身を包んだ小柄な人物に押しのけられてしまう。それでも天国の門に立つことができたと喜んでいたとき、自分の身代わりとなった人物がひとり別の客車からやってきた。そして、自信をもって前に進み出て、自分の通行券に注目してもらうため頭をあちらこちらに向けたが、聖ペトロにとって、こうした割り込みは、低級で場違いの戯れで、面白がるものではなかった。聖ペトロは、冷淡な態度で、厳しく大司教に言い渡した。「列車にお戻りください。職業ユーモア作家は、ここでは認められないのです。」

感情を害された大司教は、ぐっと全身を伸ばして立ち、自分の通行券に手を伸ばして、かすかにわかる程度のおじぎをして、むっとしている聖人に手渡した。だが、厳かな口調で、「あなたのことを知らないが、まちががなくペンネームは知っている。このような途方もなく無礼な行為にけりをつけ、即刻列車に戻るよう命じなければならない。」と申し渡すペトロに、大司教はペンネームではなく称号だ、と滑稽にも抗弁するが通じない。ペトロは、ユーモア作家に対してここでも、軽薄で、神聖を冒す野卑な者という固定観念を披歴している。さらに、天国全体で、

いまかいまかと到着を待っている輝かしい高位聖職者と見せかけてだますという侮辱が加えられたことに憤り、窒息しそうになる。天国の門の番人であるペテロから、ユーモア作家という職業的理由から、カンタベリー大司教が黄泉の国行きを宣告されるというアイロニーがある。茫然とした大司教が、ふと手にしている「硫黄がかった色の通行券」に眼を落したとき、哀れを誘う声でつぶやいたのが、「マーク・トウェイン？—マーク・トウェインだって？なにかの間違いだ。」

まさにこの時、「南西部出身の騒々しいおしゃべり」が、神を賛美する言葉を口にしながらやってきて、大司教をじゃまにならない所に肩で押しやる。それから、歓喜してつぎのように叫ぶ。

“Glory and amen, old Sam’ *got* there! —hey, boys?” and he swept the circle of angels and elect with a joyous eye. To the Chief of the Apostles he exclaimed in his great voice, “*Know* me, hey?—I *bet* you do! Old Sam Jones—*Reverend* Sam Jones —old iron-bound brass-mounted copper-bellied hell-smiter and Satan’s-terror from the wilds of Texas! Shake!”¹²

ここに引用した箇所は、マーク・トウェインの口語体を見事に文字で表現する才能をうかがわせるところである。サム・ジョーンズの出身および活動の拠点は、前述したように、テキサス州ではないが、この作品では、南西部のジョージア州¹³よりずっと西のフロンティアに移している。それにより、ペテロをはじめ天使たちに対するくだけた挨拶の口調や、典型的なフロンティア・ユーモアである「トール・テール」(ほら話)

12 *Ibid.*, 200.

13 アメリカのユーモア研究の権威、Walter Blair は、その *Native American Humor* のなかで、1830 年から南北戦争後までの南西部の地域を「テネシー州、ジョージア州、アラバマ州、ルイジアナ州、ミシシッピ州、アーカンソー州、ミズリー州」と指定している。

になった自己アピールの仕方は、いっそう効果的になったといえよう。

「握手」といわれたペテロは、身震いをして、冷たい事務的な声で、「人物証明書を見せてください。」と求める。財布から取り出された乗車券をゆっくりと時間をかけて調べてから、ペテロは、専門家を呼び、念入りに検査させる。それが本物であったとわかると、ペテロは、失望し、戸惑いをみせた。なにか欠陥はないか、とさらに専門家に問いただす。「彼は受け入れなければならない。」といわれ、門のなかに入ることを許すが、ただし、正門からではなく、「裏道を回ってくれ。防寒用のオーバーシューズも脱いでくれ。声がわたしの耳に聞こえなくなるまで、さるぐつわをはめろ。ここはテキサスじゃないのだ。」とペテロは命じる。

ペテロは、さきほどの大司教に声をかけ、新たに調査をし直し、間違いとわかれば、中に入れるといったのに対し、大司教は、ためらいながらテキサスから来た「あの人も残るのですか」と尋ねる。そのようだとペテロが答えると、大司教は、直ちに、「黄泉の国方面、ご乗車願います。」と叫ぶ車掌の方に向かって行ってしまった。大司教もまた、ペテロと同様、サム・ジョーンズといっしょに天国にいることを嫌悪したのである。

その後に、再度、マーク・トウェインに対して長々と調査がなされたが、最終的に専門家の意見で、ペテロは、しぶしぶ許可する。「もし思い通りにやれたら、あなたもあのテキサスの無法者もいっしょにさっさと始末をつけていただろう。」とペテロはいう。マーク・トウェインが耳にした天使たちの会話から、法王アレクサンダー四世やスペインの宗教裁判所初代長官のトルケマダやフランス王ヘンリー二世の妃カトリーヌ・ド・メディシスなどが天国にいることがわかったが、もっと上層階級の人々がここから移住することを考えていると耳にしても驚かない状況になっているという。天国も階級社会のようである。語り手は、天国

にいた一週間、人びとを喜ばせるようベストを尽くしたが、偏見に囚われている彼等は、語り手がいつも軽い娯楽的な会話ばかりしているのが我慢できないのである。

このような天国を経験した語り手は、サム・ジョーンズを見て、正當に評価をし、賛辞を呈しているといえよう。ジョーンズは、休むことなく、最高の誠実さで心底から説教をし、また熱心に説くこともしていたが、天国の住人たちをぞっとさせることになったのは、ジョーンズの使った俗語であった。それが住人たちの不満の原因となり、こぞって黄泉の国へ脱出したのである。集団的大移動が月曜の早朝に始まり、土曜の夜、閉門したとき、そのテキサス人だけが天国を独占することになったのである。

「人間に関するすべての事は、哀愁に満ちている。ユーモアの隠れた源泉は、歓喜ではなく、悲哀である。天国にユーモアはない。」(Everything human is pathetic. The secret source of Humor is not joy but sorrow. There is no humor in heaven.) このマーク・トウェインの肺腑を衝く言葉から、人間に関する英語、human あるいは humanity とユーモア (humor) とは、語形が類似しているだけでなく、意味において密接な関係のあることに改めて気づかされる。説教者たちは、キリストの福音によって与えられる「歓喜」について伝道を通じて語るとすれば、地上に生きる人間の「悲哀」について笑いを通じて語るのが、ユーモリストであると思われる。説教者とユーモリストは、人間性の両面を教導するミッションを相互にもっている、マーク・トウェインは確信していたといえよう。

〔引用文献〕

- Baetzhold, Howard G. and Joseph B. McCullough, eds.
The Bible According to Mark Twain. New York: Touchstone, 1996.
- Blair, Walter. *Native American Humor*. San Francisco: Chandler Publishing Co., 1960.
- Branch, Edgar Maruquess, Michael Frank and Kenneth M. Sanderson, eds.
Mark Twain's Letters Vol.1 1853-1866. Berkeley: U of California P, 1988.
- Brodwin, Stanley. "Mark Twain and the Myth of the Daring Jest." *The Mythologizing of Mark Twain*. Sara de Saussure Davis and Philip D. Beidler, ed. Alabama: U of Alabama P, 1984.
- Browne, Ray B., ed. *Mark Twain's Quarrel with Heaven*. New Haven: College & University Press, 1970.
- George, Timothy, ed. *Mr Moody and the Evangelical Tradition*. New York: T & T Clark International, 2004.
- Jones, Sam P. *Sam Jones' Own Book: A Series of Sermons*. Columbia, SC: U of South Carolina P, 2009.
- Reynolds, David S. "From Doctrine to Narrative: The Rise of Pulpit Storytelling in America." *American Quarterly*, 32.5 (1980): 479-498.
- Talmage, T. De Witt. *The Wisdom and Wit of T. De Witt Talmage*. New York: George H. Doran Company, 1922.
- Tidball, Derek. "Power 'In' and 'Upon': A Moody Sermon." in Timothy George 2004.
- Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer*. New York: W.W. Norton & Company, 2007.
- . *Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- . *My Autobiography: "Chapters" from the North American Review*. Mineola, New York : Dover Publications, 1999.
- . *Roughing It*. Oxford: Oxford Up, 1996.
- Zall, Paul M., ed. *Mark Twain Laughing: Humorous Anecdotes by and about Samuel L. Clemens*. Knoxville: U of Tennessee P, 1987.
- 朝日由紀子 「Steve Courtney, Joseph Hopkins Twichell: The Life and Times of Mark Twain's Closest Friend」『マーク・トウエイン研究と批評』第9号 南雲堂 2010.